

子どもが教えてくれたこと  
～安曇野プラン実践記録～

清水響（しみず・ひびき）  
がじゅまる教室主宰

わく星学校では水曜日のスタッフをしています。本業は「がじゅまる教室」という、知的しょうがいがある子どものための算数教室をしています。わく星学校とがじゅまる教室は、私にとって、片方で学んだり得られたりしたことがもう片方の実践に役立つという、とてもありがたい関係です。

がじゅまる教室が行っているのは、「安曇野プラン」という知的しょうがいを持つ子どもたちを対象にした算数プログラムです。安曇野プランに出会い、それを実践するためにがじゅまる教室を立ち上げ、今年で4年目になります。今回は、がじゅまる教室のことを書きたいと思います。

## 安曇野プランとは？

ほかの人たちはヒョイと飛び越えていく段差でも、足が悪い人にとっては大きな壁になり、その先に進めないことがあります。だから、建物を建てたり道路を作ったりするとき、出来るだけ段差をなくしたりスロープを付けたりすることで、車いすの人でもそうでない人でも自由に行き来できるように工夫したりします。いわゆる「バリアフリー」といわれるものです。

知的しょうがいがある人にも、同じことが言えます。ほかの人たちが簡単に成長の過程で飛び越えていく認識の段差が、知的しょうがいのある人には大きな壁になります。そこで、認識のスロープを作っていくことで、知的しょうがいのある人でも算数を楽しめる（そう、算数って楽しいんですよ！）。頭の中のバリアフリーの工夫をしているのが安曇野プランです。

例えば、ほとんどの人はいつの間にか獲得している「数」という概念ですが、これもちょっとした壁になります。これまでの特別支援教育では、数を獲得していない子に対しては、日常生活の経験を多く積むことが主で、（もちろん、これもとても大事なことです、）子どもが数を獲得するまで成長するのを待つ、もしくは、お題目のように数を「唱える」ことを覚えさせるという方法が多くなされてきました。

この数の概念を獲得するために安曇野プランがヒントにしたのは「人類史」です。人間（ホモ・サピエンス）が地球に誕生して約20万年ですが、数の概念ができたのは約5千年前と言われています。しかし、数の概念が生まれる前の時代も、人々はいろいろな工夫をして、（例えば羊の数を管理するのに小石を使ったり、家族の人数をひもの結び目で把握したりして、）足し算や引き算などの場面も解決してきたあとが遺跡の中に残っています。人間が数を獲得する前にも、豊かな量の世界があり、その中で人々は数の概念を作り出す土

台を作ってきたわけです。これをプラン化した、安曇野プランの「数に入るまで」の流れをご紹介します。

## 数に入るまで

子どもとのごっこ遊びの中で、次のような場面を作ります。お人形のお客さんたちがお家に遊びに来ます。お客さんはお腹がすいているので、食べ物をあげることにします。(図：数に入るまで1)

最初の段階では、直接お客さんにおにぎりをあげる、という、いわゆる1対1対応をしてもらいます。

お客さんたちにぴったり食べ物をあげられるようになったら、今度は、食べ物をお店に買いに行く、ということを行います。この時、お店とお家は離れているので、そのままとなかなかぴったり買ってくることはできません。まずはお客さんをお店と一緒に連れていくとぴったり出来る、という経験してもらいます。その後、今度は「お客さんが風邪で一緒に行けない」という場面を作ります。子どもは、一緒に行かないとぴったり準備できないことを知っているので、大抵困って買い物に行きたがりません。この時、お客さんが「私の絵を描いて、代わりに連れて行ったら？」と提案します。子どもはメモ用紙にお客さんの絵を1匹ずつ描いて、それを代わりにお店にもっていきます。

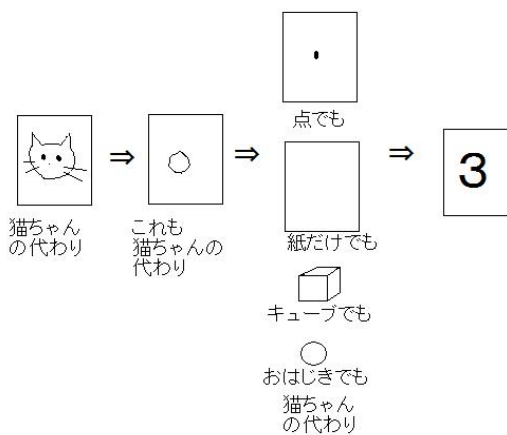
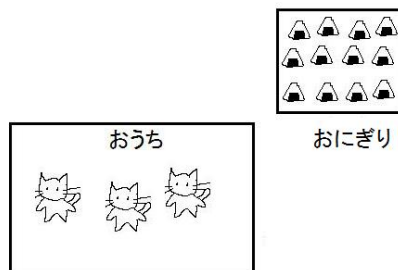
この絵が、最初はとても具体的にそっくりに描かないと「お客さんの代わり」と見なされなかったのが、だんだん「丸でも大丈夫」「点でもお客さんの代わり」「紙だけでも」「キューブでも」「おはじきでも」お客さんの代わりになるということがわかってきます。そう

なって初めて、「数」の勉強に入れるのです。(図：数に入るまで2)

(図：数に入るまで2)

子どもは遊んでいるつもりの中で、楽しみながら人類が数を獲得してきた歴史をたどり、数概念獲得の力を育てていく安曇野プランに、私は惚れてしまったのです。

そしてさらに、安曇野プランの良いところは、正解は「大人や教師が提示するもの」ではなく、つねに「場面の中にある」のです。正解はだれか偉い人が持っているのではなく、自分で場面の中で確認できるものなのです。数のプランのあとは、足し算、引き算、かけ算、割算、方程式とプログラムが続くのですが、すべてにおいて、正解は、本人が場面の中で確かめるようになっていきます。具体的に言うと、お客さんに食べ物を配って「ぴった



り」かどうかを確認し、「いただきます」をします。

今、かけ算の勉強をしている中 3 の子は、私がうっかり「いただきます」を忘れて次の課題に行こうとすると、「なんで食べささへんねん！」と言って怒ります。そんな時、「計算って、ただ答えを出すためにするのではなくて、誰かや何かの役に立つためにするんだな」と再確認させられ、テストのための計算に毒された自分を恥ずかしく思ったりします。

## 勉強以前の話

そんなこんなで、安曇野プランを実践したい！と、がじゅまる教室を立ち上げたのですが、最初はなかなか安曇野プランにたどり着けずに苦労しました。がじゅまる教室の最初の生徒、Aちゃんが、私に「勉強以前のこと」をいろいろ教えてくれました。

ダウン症のAちゃんに初めて出会った時、彼女は中学校1年生の3月でした。親御さんの「みんなの中で、地域の中で育ててもらいたい」という思いがあって、普通学級に通っていました。とても明るく、歌と踊りが大好きで、ちょっとおませな感じの子です。まずは様子を知るためにも、安曇野プランを最初からやってみようと思いました。

週一回、Aちゃんの家に通うようになって2、3回たった頃、Aちゃんは中学校2年生に進級しました。私にもだいふ慣れ、緊張した様子もなくなってきた頃でした。

Aちゃんは突然私を無視するようになりました。しかも、単なる無視ではなく、Aちゃんの横にまるでお友達がいるかのように、1人芝居で周りとは話をしながら無視をします。とても意地悪そうにこちらをチラッと見ながら、こそこそと隣の友達と話をし、私を指さしながらキャハハと笑います。こちらが何と言っても反応せず、横にいる見えない友達と話し続け、私と目が合うと「ふんっ」とそっぽを向くのです。そのような状態が1時間近くも続く日もありました。

とても戸惑いました。私のことが嫌いなのだろうか？算数をするのが嫌なのかな？やり方が悪いのだろうか？それとも、Aちゃんは病気なのかもしれない。どうしていいのかわからず、こちらから色々と話しかけたり、Aちゃんと見えない友達との会話に無理やり入っていきこうとしたり、絵本やカードゲームを持ってきてコミュニケーションをとろうとしたのですが、うまくいきません。私自身、とても悲しい気持ちになり、どうしていいのかわからずに途方に控えていました。

そのようなことが2・3週間ほど続いたある日、「もしかしたらこれは、Aちゃんが学校でされた嫌なことを私に再現しているのではないだろうか」と、ふと思いました。2年生に上がって新しいクラスになり、Aちゃんと初めて同じクラスになった同級生が、心ない意地悪なことをしているのかもしれない。

そう思ったので、Aちゃんが無視をしている間、私はAちゃんから学校であったことの話の聞いているつもりになりました。学校であった嫌なことを言葉ではうまく伝えられない代わりに、その様子を1人芝居で再現して私に伝えたがっているんだな、と思いながら、その様子を見ていました。見ているうちに、私の中で、Aちゃんを無視するクラスの子

ちへの怒りがむくむくとわき上がってきたので、怒りをこめてこう言いました。「本当にいやになっちゃうね。だれ？そんなことをする人は。私がやっつけてやる。」すると、Aちゃんは一瞬ハッ、とわれに返りました。そして、にっこり笑って、「しゃあないやん。さあさ、勉強、勉強」と言い、つき物が取れたかのようにスッキリと安曇野プランに入ることができたのです。それは、とても驚いた瞬間でした。

その後も、がじゅまる教室の最初の10分ほど、Aちゃんは私を無視しました。私は、「ああそうかそうか、Aちゃん大変やな、えらいな、その子本当に意地悪だね、本当にいやになっちゃうね」と、Aちゃんの気持ちを代弁しながらそれを聞きました。すると、一通り1人芝居をした後、気持ちの切り替えができ、ずっと勉強に入れるようになりました。

大人でも、大きなストレスや悩みがある時、何も手につかなくなってしまう時があります。そんな時に、愚痴を聞いてくれたり、状況をわかってくれる人がいるだけでつらさが軽減されたりします。しょうがいがあってもなくても、つらいことや悲しいことを吐き出し、他人と共有し、寄り添ってもらふ事で、人は前を向いて歩いて行ける。Aちゃんは私に、勉強以前にもっと大切なことを教えてくれました。

それともう一つ教わったことがあります。最初、私はAちゃんの無視という行動が、どういう意味を持つのか全く分かりませんでした。しかし、その行動の裏にある本当の理由がわかった時に、私とAちゃんは通じ合えたというか、近づくことができました。一見奇妙に見える行動の裏には、何か必ず理由がある。「不思議なことをしてよくわからない」で終わるのではなく、その行動の真意、本当の意味を探ることの大切さを教えてもらいました。

## 勉強以前の話 その2

そんなハプニングを乗り越え、やっとのことで安曇野プランに入ることができたのですが、まだまだ「じっくり取り組む」には程遠く、未熟な私には乗り越えるべき課題がありました。

先ほど説明したように、お家にお客さんが来て、お客さんにおにぎりをぴったりあげてね、とお願いするのですが、Aちゃんは席を立ってどこかに行ってしまうのです。基本的にがじゅまる教室は訪問指導なので、Aちゃんの家で勉強するのですが、課題を出すとトコトコと歩いて部屋をうろうろしたり、本棚にある本を取ってページをめくったりし始めて、机に座って課題に向き合うことをしませんでした。

そこで私は「難しかったのかな？」「興味がなかったのかな？」と思って、Aちゃんがうろうろし始めるとその課題を片づけて、他の課題にしたり、ゲームを出したりしました。そしてAちゃんが机に帰ってきても、新しい課題に取り組もうとせず、時間だけが過ぎていきます。Aちゃんが興味を持ちそうなものをたくさん用意していくのですが、やはりうろうろしてしまう。「何が悪いんだろう？」と毎回考えながら、いろいろ試してみることが何回か続きました。

ある時、「ああ、またどこか行っちゃったなあ、今回もダメだったなあ」と思いながら、なすすべもなく、部屋を立ち歩くAちゃんを見ていたときです。Aちゃんは、自分の鞆から安曇野プランとは全く関係のない英語の教科書を机の所に持ってきて、めくりながら「ん？5やろ…」とつぶやいているのが耳に入りました。その時の人形の数で5でした。Aちゃんは、英語の教科書とお人形を交互に見ながら、考えている様子でした。

そう、Aちゃんは考えていたのです。考えるときに、きっと何か本を見て考えるといい考えが浮かぶような気がしたのでしょう。立ち上がってうろうろしていたのは、そのための本を探していたようでした。そして、私は自分を反省しました。Aちゃんは、考えようと思って本を取りに行っているのに、その間に私は課題を片づけてしまっていたのです。机に帰ってきたら考えようとしていた課題がなくなっていて、別のものになっている。それでは、やる気がそがれるのは当然です。私がせっかちすぎて、様子を見ることさえしてなかったのです。

それからAちゃんは、雑誌やら英和辞典やら、関係ない本を持ってきては、その本をめくりながら考え、課題に向き合うようになりました。

このハプニングから学んだことは、待つこと、見守ることの大切さです。こっちが先回りしていろいろなことをやらずに、子どものペースを見ながらじっくり待つこと。子どもを信じて待っていると、「この子はなんてすごいんだろう」とびっくりする瞬間が必ずあります。

そして、勉強というと机に向かって頭を抱えながらするイメージが私の中にあっただのですが、考える方法・学び方は人それぞれ違うということも知りました。こちらが形を押しつけなくても、子ども自身にまなびたい欲求、自分の世界を広げたい欲求があるので、課題が適切であれば喜んでチャレンジしていくということも、その後の実践で実感している事です。

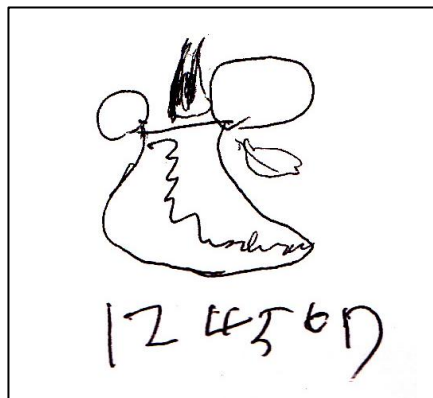
## 蓄える時期、飛躍の瞬間

このように、勉強以前のレッスンをAちゃんから受け、ようやく安曇野プランの勉強ができるようになりました。と同時に、これまでの教室の中でAちゃんの様子がだいぶ分かってきました。

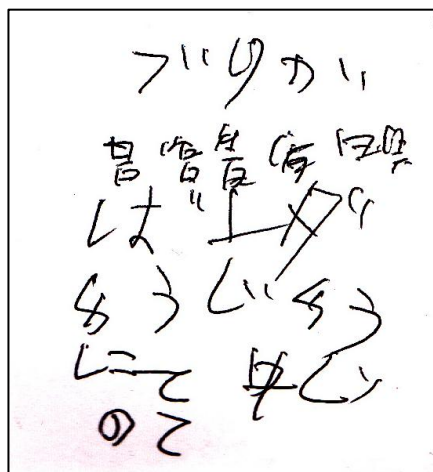
Aちゃんは、小学生のころから普通学校の普通学級にずっと通っていて、平仮名・数字などの書き方はずっと学校で練習をしてきていました。数は数えることができるのですが、5以上になると手と口が合わずに正確に数えられない状況でした。また、お客さんが3人来てお店におにぎりを買ってくる場面で、お客さんの数は「3」と数えられるのですが、お店で「3ください」と言うことができませんでした。つまり、道具として数を使えるという状況ではなかったということです。文字についても、同じように、道具として使える状況ではありませんでした。だから、お絵かきをしてお買い物に行くところから、だんだん抽象度を高くしていく過程をじっくりして、数の意味と便利さをつかんでもらおうと方

針を立てました。

初めて、お客さんがお店へ一緒に行けなくなり、お客さんの絵を描いてお店に行く場面をした時のことです。パンダのお客さんが6人ほど来ました。メモ用紙にAちゃんがパンダの絵を描き始めました。じっくり見ながら、結構細かいところまで、丁寧にパンダを描いていました。1匹目を描き終わったところで、Aちゃんは「ああ、疲れた、めんどくさいなあ」とでもいような顔をしました。そして、何かを思いついたのか、じっと考え、そのパンダの絵の下に124567と、数字を描いたのです。(図：パンダと数字)



あれ？数字を描いたな、と思って見ていると、次のメモ用紙を取り出し、文字を書きはじめました。よくわからない文字もありますが、真中に、「ぱんだ」らしき言葉が、はっきり書かれています。(図：パンダの文字)



Aちゃんがこれまでずっと蓄えてきて、しかしまだ道具として使えていなかった文字とか数字を、こんな場面でこんな風に使ったらいいんじゃないかな、とひらめいた瞬間でした。これまで意味もわからず繰り返し練習してきた文字が、人に何かを伝えるための便利な道具だということを、Aちゃん自身が発見し、試してみた瞬間だったのです。

これ以来Aちゃんは、文字や数字の役割が劇的に変わったため、おはじきやキューブで数の代わりにする段階をすっ飛ばして、あっという間に足し算に進んで行きました。そして、文字を書くのが大好きになり、算数の勉強なのに「今日は新聞書く」と言ったりして、文字をたくさん書くようになったのです。3年たった今では、私に毎回のように楽しいお手紙やメールをくれます。

## 足し算の向こう側にあるもの

Aちゃんも、他の子もそうですが、安曇野プランの足し算の課程（教具を使った足し算から、暗算へ向けての課程）を、まるでパズルでも解くように楽しみながら果敢にチャレンジしていきます。この足し算の暗算ができるようになることが、本当にすごい意味を持っていることを感じます。

足し算の暗算をするというのは、まずは頭の中に量を描けなければいけません。ということは、例えば、同じような大きさの10円玉と100円玉の価値の違いを頭の中に描ける第一歩となります。

もうひとつは、量と量を頭の中に描いて、頭の中でくっつける、すなわち目の前にない物を頭の中で動かす事が出来るようになるということです。それは、日常生活の中でも、例えば、今日はカレーだからお箸じゃなくてスプーンにしようとか、先のことを考えて、頭の中で段取りをして準備できるようになることに通じます。未来を予測し、原因と結果を把握できるようになるなど、生活の幅がとても広がり、自立の上でも大切な力を育てることにつながっているのです。

Aちゃんがつい最近「今日はひびき先生が来るので頑張ってゲームとトランプとヘビをしますががんばります」というメールをくれました。(Aちゃんとは今、くり下がりの引き算に通じるゲームをいろいろやっています。)未来を予測して、自分はこうしようと考え、それを伝える力が育ったんだな、と嬉しくなりました。

## **競争ではなく、連帯の教育を**

がじゅまる教室で安曇野プランをしていると、算数を通じて私と生徒が結びつき、信頼関係ができていくことを感じます。子どもは算数で得た力で社会との関わりを深くしていき、私自身も他者との違いを理解し楽しめるようになったことを日々実感します。

学校教育の中では、子どもに格差をつけ分断するためにあるような算数・数学ですが、こんなに人と人とを結びつけることができる。お互いに違いがあったとしても、一緒に楽しむことができる。そんな算数があることを、多くの人に知ってもらいたいです。

がじゅまる教室では算数ですが、わく星学校では日々の生活を通じて、同じことを目指しています。誰かを打ち負かすのではなく、ともに生きること。違いは分断のためにあるのではなく、助け合い、楽しむためにあること。未来のために今を犠牲にするのではなく、今を輝かせること。わく星学校と安曇野プランに出会い、そのような教育実践が出来ることに、心から感謝します。

■がじゅまる教室への問合せ：

[gajyumarukyoushitu@gmail.com](mailto:gajyumarukyoushitu@gmail.com)